古墳時代前期における関東型一般集落

福田　聖

要旨　関東地方では、低地開発を目的に低地部の竪穴建物跡、周溝持建物跡によって構成される集落、台地上の竪穴建物跡の集落という三種類の一般集落と首長居宅によるネットワークが構成された。各集落は階層分化が不明瞭で、異なる性格、機能を持つ（関東型一般集落）。一方、東海地方における一般集落は竪穴建物のみで構成される集落（一般集落ｂ）、掘立柱建物と竪穴建物で構成される集落（一般集落ａ）があり、一般集落ａのほうが一般集落ｂより階層性が高く、出土遺物にも階層差があるとされている（東海型一般集落）。関東地方の一般集落は性格・機能分化は認められるが、階層差が不明瞭である。関東地方の地域首長は、外来の技術を持つ集団を在来の社会の中に取り込み、開発を推し進めた。その際に外来集団は集落内における外婚集団の一つとして、在来の分節集団と婚姻関係を結んで擬制的な親族関係になり、在地社会へ取り込まれた。関東地方では、こうした分節集団の力が強く、地域経営においてはその意向を敏感に反映する必要があり、集落間の階層分化は不明瞭となった。東海地方では分節集団間でそのようなことがなく、階層化が進む。古墳時代へ移行しても、弥生時代からの社会状況により、各地の古墳時代前期の社会は様相がかなり異なることが明らかになった。

1．はじめに

関東地方では、弥生時代終末から古墳時代前期に多くの外来系の遺構、遺物がもたらされている。

筆者はこれまで周溝持建物跡や土器、木器を検討してきた結果、新たな技術を用いて低地の大規模な開発を進めるための、古墳時代前期における様々な社会的変革を明らかにできた。そうした変革のために地域首長の存在が要請され、地域首長は低地域に複数の集落から人々を集め、その中に外来系の要素を組み込んで、大規模な開発を進めた。その結果、集落間における機能分化、階層分化が進み、出現期古墳が登場するに至る。特に、一般集落間の機能や性格の分化は、遺構や遺物の違いによく現れている。

本稿では、主に木器の分析から東海地方の社会構造についてモデルを示した樋上昇氏の論考と対比しながら、関東地方における古墳時代前期の社会の様相を明らかにする。

合せて、外来的な要素を取り込んだそうした社会はどのようにして形成されたのかを、婚姻関係を軸に仮説を提示する。

2．古墳時代の社会システム

「低地遺跡から見た関東地方における古墳時代のはじまり」（福田2009以下では、「低地」として表記）で述べたように、古墳時代前期の荒川低地、東京低地、中川低地を中心とした関東地方中央域における低地部では、竪穴建物跡、周溝持建物跡によって構成される集落が展開している。今一度それらの性格について見ておこう。

埼玉県戸田市鍛冶谷・新田口や川島町富田後、東京都北区豊島馬場遺跡のような周溝持建物跡の集落は、外来系の要素が多く見られるが、例えば外来系土器は焼成が甘く、模倣も巧みとは言い難い。器面が荒れ、手に取ると壊れてしまうようなものが多い。また、玉作りのような付加価値生産物については、ガラス玉の生産が主体で、碧玉や水晶といった類の玉作りは行われていない。

竪穴建物跡の集落は、外来系土器は多いとは言い難いが、模倣が巧みで、在来の土器も、作り、焼成ともに良好で、優品が多い。また、玉作りでは、ガラス玉の生産に加えて、碧玉（緑色凝灰岩）・水晶の玉作りも行われている。反町遺跡では木器生産も行われている。

ただし、木器については、既に指摘したように、自己消費的な生産のあり方が一般的であることから、剥片等の生産に伴う遺物がないからといって生産がなかったとは限らない（福田2011ａ）。

同じ低地に立地する両者の相違は、集落の機能、性格の相違を示すと考えられる。具体的には、周溝持建物跡の集落は、外来的な要素を直接受け取る港湾的な性格、竪穴建物跡の集落はもの作りにおいて優位性が高く、北島遺跡のように方形環濠のような区画施設を持つ場合があることから、もの作りにおいて中心的な性格を持ち、周溝持建物跡の集落より階層的に上になると考えられる。

しかし、両者の関係は固定的でなく、川口市（旧鳩谷市）三ツ和遺跡のように双方の建物形式が認められる遺跡があることから、階層的な分化が明瞭であったとは考え難い。

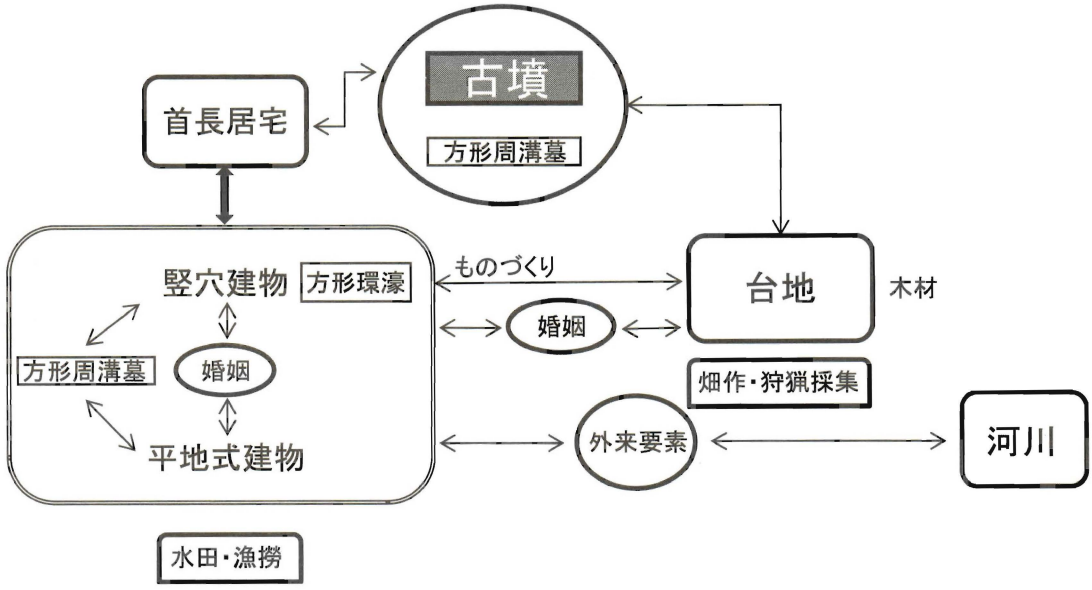
一方、台地の集落は竪穴建物跡のみで構成されている。同じ竪穴建物跡の建つ低地の集落との密接な関係が窺える。また、低地遺跡で用いられている木材は、特に建築材に針葉樹を用いている場合が多く、河畔林のみで賄えず、台地上の集落との関わりの中で調達されたと考えられる（福田2011ｂ）。

また、これら三つの形の集落は、同様な方形周溝墓を用いており、隔絶した階層的格差は想定しづらい。加えて、各々の集落において、鍋である甕類には顕著な差異が認められる場合があるが、壺については同様の壺を用いている。これは三者が没交渉的なあり方ではなく、相互に密接に関連しながら展開していることを示している。

関東地方の古墳時代の開始に当たっては、低地開発を目的とした、台地、低地の２種類の集落、首長居宅による新しいネットワークを構成するために地域首長の存在が社会的に要請された。

関東地方の古墳時代の始まりは、古墳時代的な一般集落を中心とする社会システムの実現が大きな鍵になっていたと考えられる（第１図）。

では、本論で対象としてきた荒川低地、東京低地がある関東地方以外の地域では、どのように古墳時代が始まっているのであろうか。



第１図　関東地方の古墳時代前期社会のイメージ

3．東海地方における一般集落

2でみたような社会的な分業システムの存在は以前から指摘されてきた。例えば、弥生時代の畿内の石器製作、流通網は古くから論じられてきた分業システムである。しかし、それは地域首長の存在を社会的に要請し、逆にその首長によって社会構造が変革されたような類のものではない。

以前から言われてきた弥生時代以来のシステムと、本論で述べてきた古墳時代的な社会構造はどのように異なるのであろうか。

また、低地遺跡における竪穴建物跡の集落は中間的な階層の集落と位置づけたが、周溝持建物跡の集落や台地上の集落との頻々とした交渉が考えられ、「中間的な」階層の位置付けは、固定的ではなく多分に流動的であると考えた。関東地方における、この時期の「階層」のあり方をよく示しているといえるであろう。それは他地域の「階層」のあり方とどう関係しているのであろうか。

集落遺跡間に階層差や機能差があるような社会システムは、関東地方では弥生時代には見られなかったものである。この社会システムへの移行が関東地方における古墳時代開始期への最も大きな変革である。本論と同じく、弥生時代から古墳時代への社会システムの変革を論じたものとしては、木器の分析を通して東海地方の様相を示した樋上昇氏の論考がある（樋上2009）。

樋上氏は、弥生時代の集落が、集落の内部構造からA～Cに分類でき（表1・第2図）、各々の分類に対応して、出土遺物も異なると指摘している。差異のある出土遺物は、楽器や巴形銅器、精製容器類や武器、儀仗などの首長層の道具である。この遺構、遺物の差異は階層差を示すものだと、氏は考えられている。従って、集落A～Cは集落遺跡の階層性を表していることになる。しかし、弥生時代には首長は決して集落から独立したものではなく、区画施設や地点を違えても同一集落内に存在していた。

古墳時代になると、いわゆる首長居館が造られ、一般集落と首長とは乖離していく（第3図）。一般集落の居住域と墓域とは全く異なる場所に、首長の居宅と墓域は造られるようになっていく。この、首長層の居宅、墓域については、本論と直接関係がないため割愛する。問題となる一般集落について、樋上氏は次のように述べている（第4図）。

「まず、古墳時代の一般集落には、前述のように竪穴建物のみで構成される集落（一般集落b）のほかに、掘立柱建物と竪穴建物で構成される集落（一般集落a）も存在し、一般集落aのほうが一般集落bより居住者の階層性が高いと考えられる。そして、古墳初頭～前期前半には最上位に位置する首長居館からは、前述の威儀具をふくめたあらゆる階層の木遺品が出土するが、一般集落aでは威儀具と大型建物の部材が欠落し、一般集落bではさらに武器や楽器が組成から欠落して「日常生活の道具」しか出土しなくなる。」（樋上pp216l35～38、pp217l1～2）」

こうした一般集落の形を、東海地方の遺跡の分析によって導かれたモデルであることから、「東海型一般集落」と仮称する。

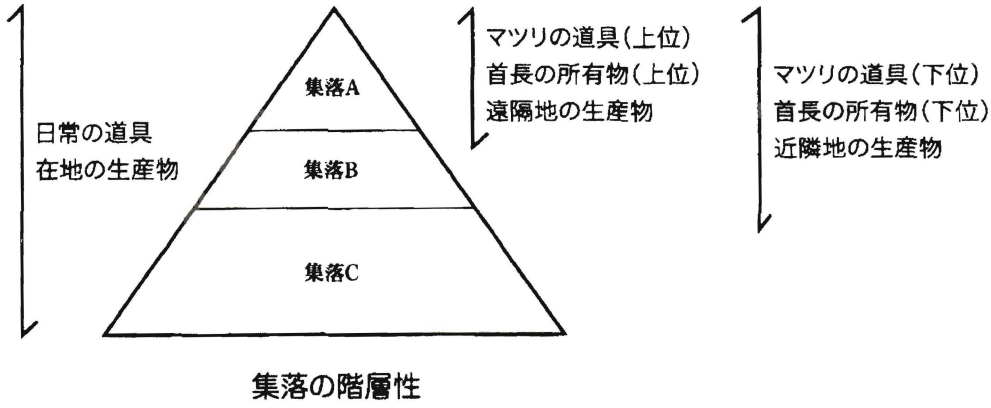
同様な、掘立柱建物跡と竪穴建物跡によって構成される集落が、上位の階層であることについては、畿内や北陸でも同様であるとする論が多い。

しかし、本論で見てきた関東地方に於いては、こうした集落は認められない。掘立柱建物跡が集落にほとんど認められないのは、岡田勇介氏が示した通りである（岡田2009）。従って、集落bのみの一般集落が存在したことになる。

本論で見てきた、竪穴建物によってのみ構成される集落と、周溝持建物跡によって構成される集落、双方とも墓域は集落と隣接して存在し、突出した墳墓の存在は認められない。遺構の上からは、東海型一般集落のような集落aを分離することは困難である。また、武器や楽器等の出土遺物はそもそも出土例そのものがなく、樋上氏の「日常生

表１　東海地方弥生時代集落の分類（樋上2010より転載）

集落の分類	遺構の分類	集落の内部構造	該当する遺跡
集落Ａ	旧国で１～３遺跡程度	・環濠などにより、居住域を複数区画に分割 ・居住域の密集度高い ・首長層の祭儀･居住施設 ・複数の手工業生産施設 ・大型方形周溝墓を核とする大規模な墓域を複数形成 ・水田城	朝日 高蔵 西志賀 八日市地方 松原 伊場・梶子など
集落Ｂ	旧郡に１遺跡程度	・複数の居住域 ・居住域の密集度やや低い ・首長層の祭儀・居住施設 ・手工業生産施設 ・大型方形周溝墓を核とする小規模な墓城を形成	勝川 一色青海 菟上など
集落Ｃ	旧郡に数遺跡	・明確な区画施設なし ・竪穴住居10数棟と掘立柱建物数棟を散在的に配置 ・居住域の密集度低い ・小規模な方形周溝墓群 ・水田域	大渕など



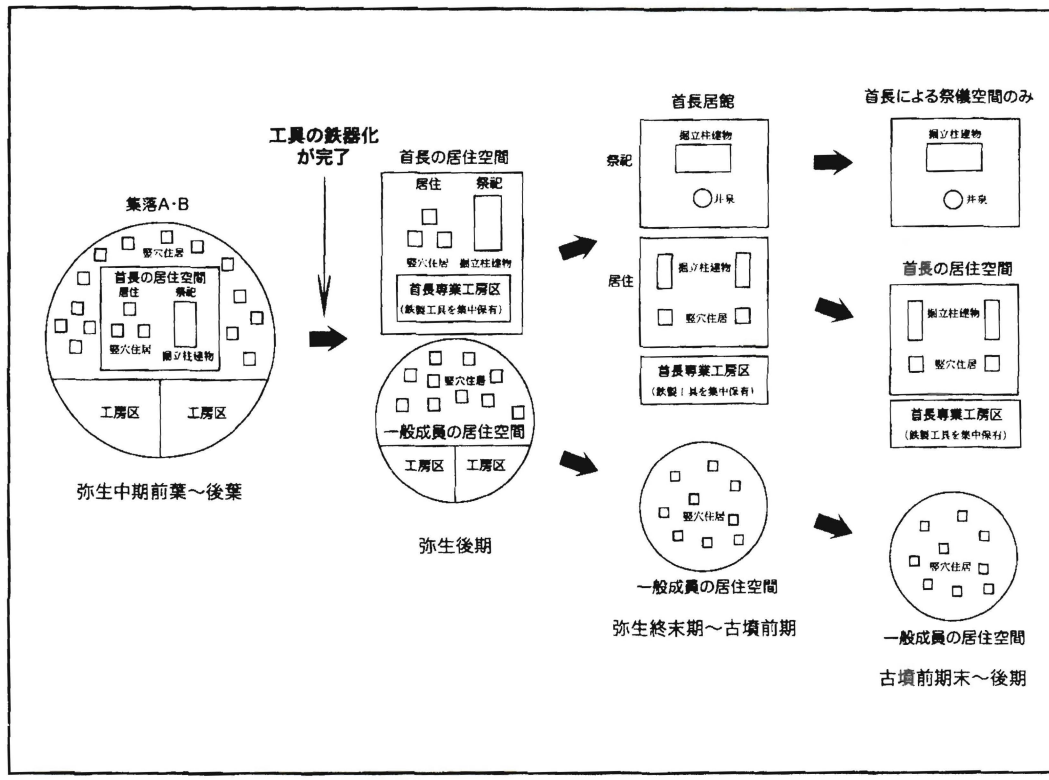
第２図　東海地方弥生時代の階層性モデル（樋上2010より転載）

活の道具」が出土するのみである（福田2011ａ）。

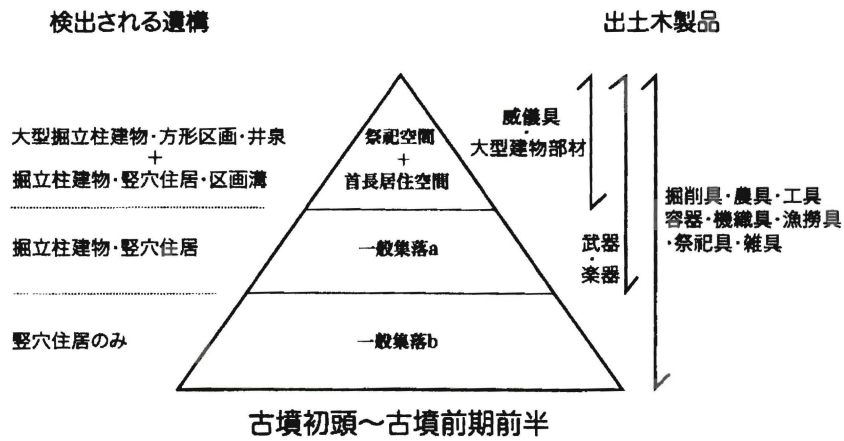
東海地方における集落ａが、関東地方において認められないのは、東海地方と関東地方における大きな社会構成の差異である。

関東地方に於いては、掘立柱建物跡と竪穴建物跡という建物の構成ではなく、竪穴建物跡と周溝持建物跡という建物の構成が軸になっている。しかも、両者には東海型一般集落の集落ａ、集落ｂのような木器にみられる階層性も見られない。では、集落間における階層性がないのかというと、そうではなく、反町遺跡や北島遺跡のような竪穴建物によってのみ構成される集落に優位性が見られ、かつ隔絶した階層的な格差というところまでは至っていないというのが実態である。

静岡県と南関東地方の、掘立柱建物跡の集落における比率の低さについては松井一明氏が指摘し



第３図　東海地方首長居宅への発展モデル（樋上2010より転載）



第４図　東海地方古墳時代初頭の階層性モデル（樋上2010より転載）

ている（松井1995）。それより以西、北陸、近江、畿内は、掘立柱建物跡を主、竪穴建物跡が従となる集落であり、対照的である。

従って東海地方西部以西は、畿内と同様の掘立柱建物跡と竪穴建物跡によって集落間の階層的格差が示されているのに対して、東海地方東部、関東地方では竪穴建物跡と周溝持建物跡という建物跡の構成で、両者は階層的格差というよりも、社会的な性格、機能の違いを示すと云い換えられる。

このような状況から、関東地方では、掘立柱建物跡を主体として、階層差が表現された西日本的な一般集落ではなく、周溝持建物跡、竪穴建物跡による「関東型一般集落」が展開していた社会だったと言い得るのではないだろうか。

4．関東型一般集落編成の方法

では、関東地方では、どうして掘立柱建物跡と竪穴建物跡という軸ではなく、竪穴建物跡と周溝持建物跡という軸なのであろうか。また、両者の階層分化が決定的でないのはどうしてなのだろうか。

これは、地域社会が古墳時代的な社会に移行していく中での、在来社会の新しい社会体制への安定化の方法が、西日本的なそれとは大きく異なっていたことに起因すると考えられる。言い換えれば、地域首長の地域経営の方法が全く異なるとも言い得るであろう。

具体的には、関東地方の地域首長は、弥生時代には顕著でなかった外来系建物跡や外来系土器といった文物に代表されるような外来の技術を持つ集団を、在来の枠組みの中に取り込むことによって、その新来の技術を在来の技術と融合させて、新田開発などの社会事業を実現した。

地域首長はそうして力を蓄え、出現期古墳の築造や古墳時代的な社会システムへの移行を成功させたのである。

在来の枠組みへの取り込みを考える上で、竪穴建物跡の集落では優品とでも言うべき在来系土器と、巧みに模倣された外来系土器が出土し、外来系建物である周溝持建物跡の集落では稚拙な外来系土器や部分的な模倣が行われた外来系土器が出土する点は重要である。

また、外来系建物である周溝持建物跡も関東地方独自の型式論的変化を示している点も重要であろう。

こうした様相は、集落の中で一つのモノを作る際に、単に一つの方法、規則のみで行われるのではなく、原則的な方法に他の方法が付加することによって起こる。つまり、そこに居住する集団が複数の方法を持つ集団、複数の分節集団が存在することによって起こる現象と考えられる。そうした集団は同じような方法を共有する、複数の集落に跨る集団と考えられる。社会学的には、ある種の出自集団、ソダリティーといわれるものと考えられる。こうした出自集団は、集落内では外婚集団である場合が多い。半族や胞族といわれるものであるが（註１）、それらの実態について述べる用意は私にはないため、出自集団の評価、位置づけそのものは別に譲りたい。

ここで問題にしたいのは、そうした外婚集団であるソダリティーが複数集落間に跨って存在し、そこに組み込まれることによって、擬制的な親族関係として機能しうるのではないかということである。

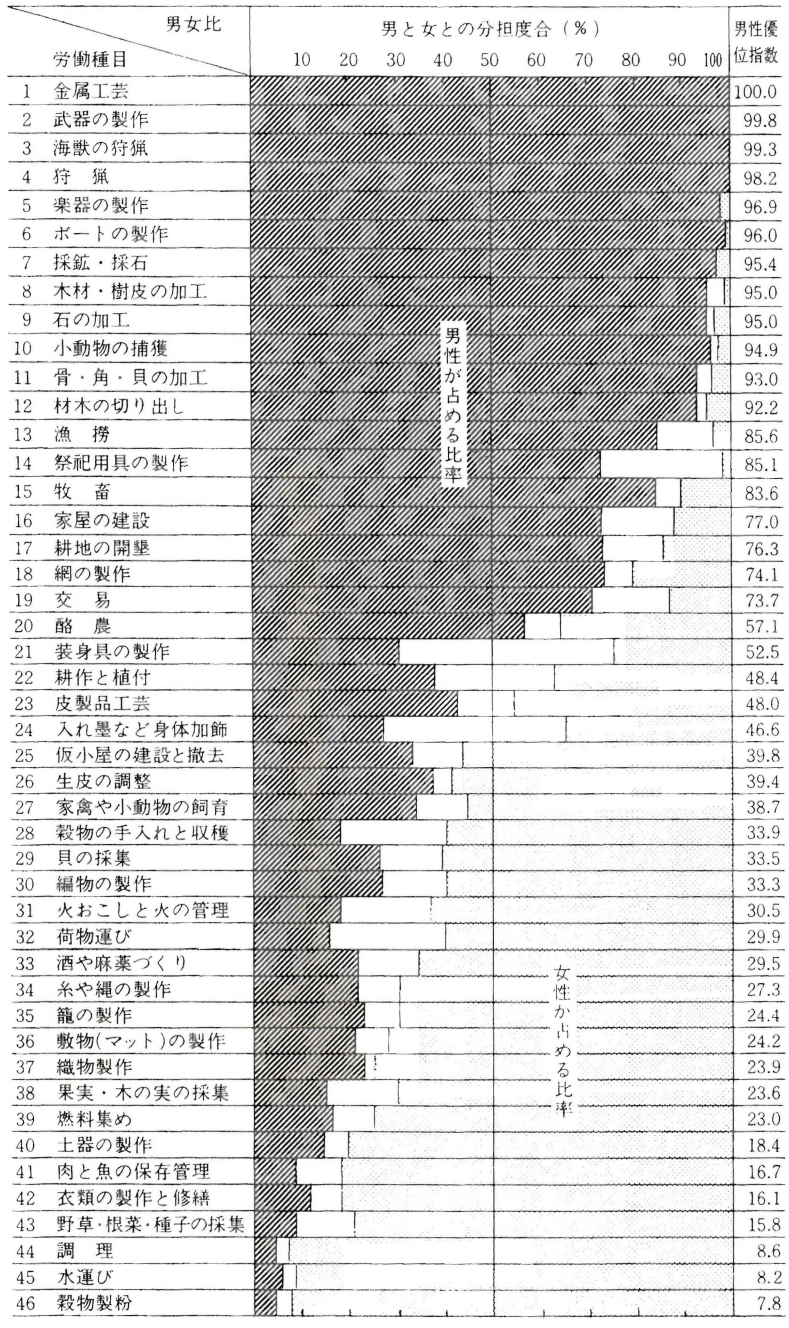
外来の技術を保有した人間が、在来社会に入る場合、考古学的には外来系土器の波及、導入の様相として整理される場合が多い。

「低地」で述べたように、比田井克仁氏が述べる、大規模融合埋没型、大規模非融合定着型、小規模埋没型、一時波及型や（比田井2004）、若狭徹氏のレベル０～２といった類似度の判定基準（若狭2007）などである（註２）。

「低地」で述べたとおり、各氏の分類は各々の地域に根差した分類であり説得力があるが、荒川低地や東京低地などの低地部の遺跡における外来系土器の模倣は、こうした分類のみではすっきり理解できない。荒川低地、東京低地で見られる部分のみの模倣で、しかもそれが大幅に崩れているような実態とは直接そぐわないのである。

そこで、「低地」では、それが「かたちの情報」によって本来の作り手ではない人々が製作したのではないかと推定した。逆に、忠実な模倣が行われている場合には彼の地から作り手が来ている可能性がある。前者は周溝持建物跡の集落で、後者は竪穴建物跡の集落でのことである。当然ながら、両者には在来系土器の方が多いのであるから、そうした土器の作り手がベースとして存在すると考えられる。

同様に外来系建物である周溝持建物跡はそれを



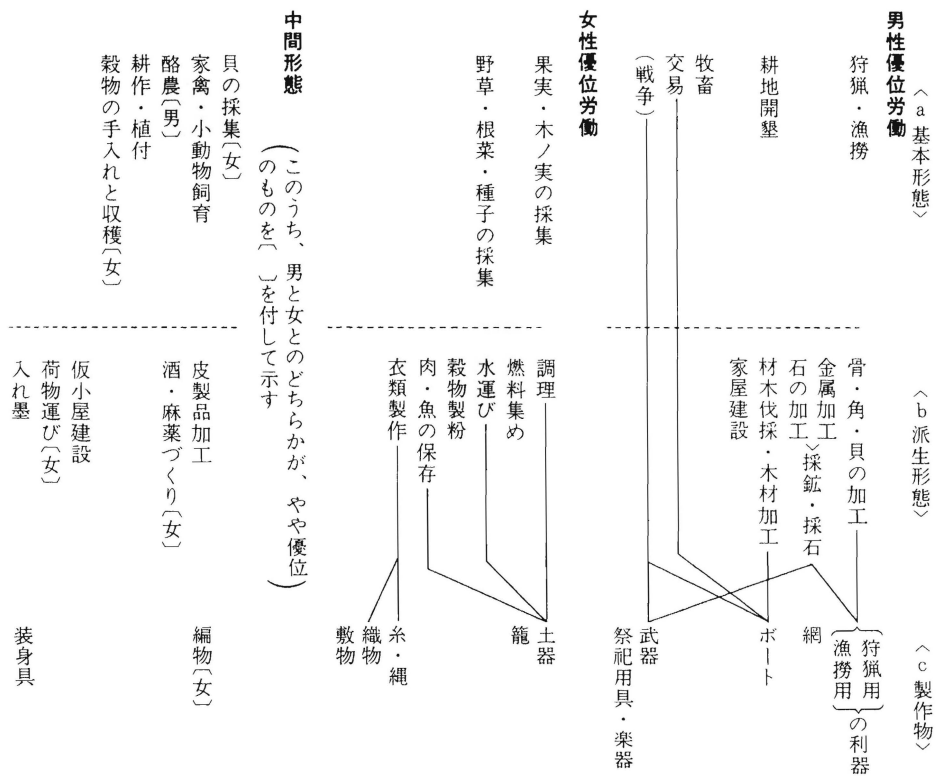
第５図　マードックによる労働の性別分業（都出1989より転載）

建てる本来の人々と、それ以外の人々の協業の継続によって型式論的変化が生まれたと考えられる。

こうした複数の在来系、外来系分節集団が各集落において、どのように居住していたのかによって、外来系文物の様相が異なると考えられる。

ここで改めて問題になるのが、土器製作、家屋建設が、性的にどのように分業されていたのかという点である。

性的分業に関する民族誌的な仕事としては、古典的ながら、Ｇ・Ｔ・マードックの一連の仕事がある（第５図）。この成果を受けて都出比呂志氏は、出自規定や財産継承、労働の専業化や階級制といった社会的な文脈を充分に考慮する必要があるとの但し書きを付けながら、労働の性別分業について分析している。氏は、各労働項目に相互に関連性があるものが見られることから、基本的な



第６図　労働の性別分業の整理（都出1989より転載）

生業を基本形態（a）、関連する手工業生産などを派生形態（b）、関連する製作物（c）に整理した（第６図・都出1989）。そして、男女の分業は、「筋肉労働の比重が大きく遠隔地への遠征の必要度が高いもの」（同上pp273l3）を男性が、「筋肉労働の比重が相対的に低く、かつ居住地の近隣で営みうる労働」（同上pp273l4）を女性が分担する傾向が強いとしている。

また、弥生土器の製作者についても言及し、世界の民族誌における自己生産的な土器作りが、例外を除いてほぼ女性が製作者であり、古代日本においても土師器製作が女性によるものであることから、女性が主たる作り手であるとしている（同上pp295）。

以上の都出の研究成果を参照するならば、建物の建設は男性、土器の製作は女性の労働である可能性が高いことになる。

ここで、先ほどの外婚集団である分節集団が複数居住する集落像に立ち返る。何らかの形で外来者が在地社会に入る場合、外来集団が外婚集団の一つとして在来の社会に組み込まれたと考えられる。各集落内において、同一分節集団内の婚姻が行われないと仮定すれば、外来集団内での婚姻は考え難く、むしろ在来集団の成員との間で婚姻関係が行われたと考えられる。その結果、族籍の移動の問題はあるが、外来成員は在地社会の一員となると考えられる。

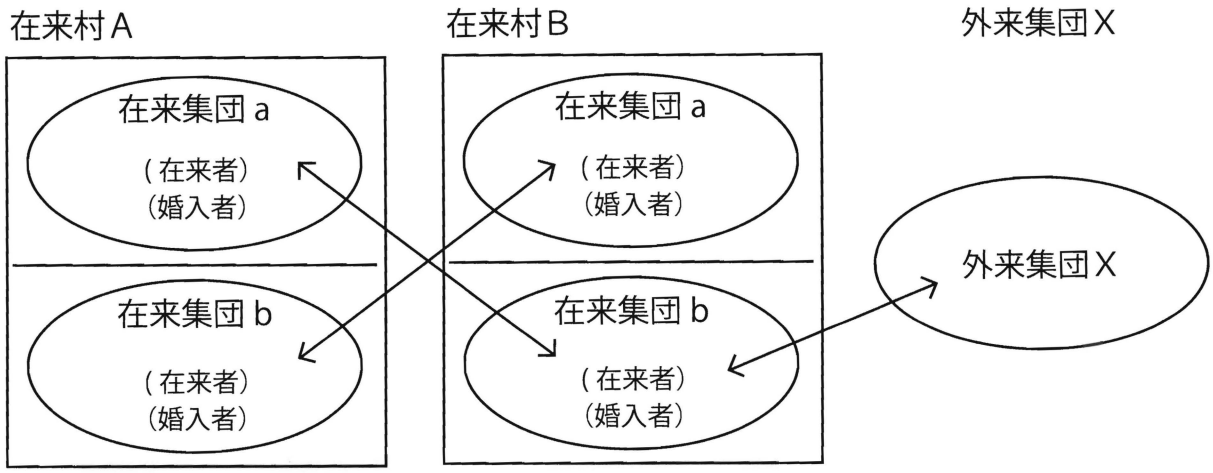
在来集団と外来集団との間で、分節集団としての婚姻関係が結ばれ、かつ先程の性的分業が妥当とするならば、その結果は表２、第７図のようになる。

こうした婚姻関係による外来集団の在地社会への取り込みが行われたことにより、外来系土器の巧拙、周溝持建物跡の型式変化という事態が起こったと考えられる。

外来系文物の製作者を、建物の建造を男性、土器の製作を女性とすると、竪穴建物跡の集落が在来集団の男性大多数と少数の外来系の女性を含む

表２　外来要素と男女の組み合わせ

建　物　跡　の　種　類	男　性	女　性	土　器
周溝持建物跡のみ 豊島馬場、鍛冶谷・新田口、富田後	外来集団Ｘ男	在来集団Ｂ女	模倣ランクＢ
周溝持建物跡＋竪穴建物跡 三ツ和・大久保領家片町	外来集団Ｘ男 在来集団Ａ男	在来集団Ｂ女	模倣ランクＢ
竪穴建物跡のみ 反町・北島	在来集団Ｂ男 在来集団Ａ女	外来集団Ｘ女	模倣ランクＡ



第７図　半族による外婚集団と婚姻関係モデル

在来集団の女性、周溝持建物跡の集落が外来集団の男性と在来集団の女性という組み合わせだったと想定できる。もちろん、集落には他にも複数の在来の分節集団があるのは言うまでもない。

こうして、外来集団、あるいは外来者は、在来集団と親族関係になり、そのもととなる外来系出自集団も擬制的な親族関係となる。その結果、階層的格差が決定的ではない一般集落の形が生み出されることになった。

古墳時代前期の関東地方で推し進められた、こうした社会関係の再構築が、「関東型一般集落」の形を生み出し、古墳時代前期に一般的に関東地方で見出せる「在地化した外来系」文物を生み出したのである。

５．地域首長と関東型一般集落

それでは、どうして関東地方ではこのような一般集落の形なのであろうか。３で述べたような手続きが、外来系集団を取り込むために行われたのであれば、それは西日本での集落の階層化よりも更に複雑であったと考えられる。しかし、そうせざるを得ない事情があるのだとすれば、それは編成される側にかかわる問題であろう。

弥生時代の社会は、部族制社会の延長線上にある首長制社会と評価されるが、古墳時代前期において、そうした社会の利益を代表するものとしての首長の立場が、地域経営の形に反映されているのではないだろうか。

関東地方、松井の論を参照すれば、静岡県東部

以東の社会は、西側のそれに比べて、地域社会の分節集団や集落の力が強く、社会の要請によって登場した地域首長は、その意向を敏感に反映したのではないだろうか。

弥生時代の関東地方では、吉ヶ谷式、久ヶ原式、山田橋式、二軒屋式、樽式といった各型式が相互に関係性はあるが、独立して型式が展開する感が強く、上述のような状況は想定しやすい。

また、例えば埼玉県東松山市・吉見町周辺では、古墳時代前期の前半から中葉(反町Ⅱ－1～2期)にかけて、あまり時期を隔てずに、台地・丘陵上に、諏訪山29号墳、諏訪山古墳、下道添2号墳、天神山古墳、根岸稲荷神社古墳、山の根古墳が、低地部に三ノ耕地遺跡といった前方後方墳、前方後方形墓が見られる。こうした乱立ともいえる状況は、前述のような地域社会内部の権力のあり方を象徴していると考えられる。

だからこそ、地域首長は関東型一般集落のような形で地域経営を行ったのであろう。

逆に東海地方では地域社会の内部に拮抗した力関係がなく、集落の階層分化が容易であった可能性があるのではないだろうか。

このように古墳時代前期に至り、前方後方あるいは前方後円墳が各地で同様に造られるようになる一方で、地域社会は弥生時代以来の社会状況に応じた地域毎の古墳時代を開始したと考えられる。

6．結　語

本稿では、「低地」の検討に引き続き、低地遺跡の分析を通して、関東地方における古墳時代前期の一般集落像を描出した。それは東海地方において樋上昇氏によって構築された地域社会像のモデルとは異なっている。

関東地方における一般集落の形は、「関東型一般集落」と呼び得るものである。逆に、東海地方の一般集落ａ・ｂは「東海型一般集落」と仮称できる。

このように各地の古墳時代前期の地域社会は、各々かなり異なる様相を示すと考えられる。

方形周溝墓が各地で共通して導入される共通性を以前述べたことがある（福田2005）。同様に古墳という新たな墓制を導入し、古墳時代という新たな時代への一歩を同時に踏み出したにもかかわらず、来し方の違いからその一歩は各々異なる形であった。

もちろん畿内政権との有機的なかかわりは、古墳時代を通して常に意識されなければならない。それが、時代に流れる通奏低音である。

その一方で、一般の人々は弥生時代からあまり変わらない日常を生きているのかも知れない。そうした時代の立体的様相を描きだすことこそが、考古学がやらねばならない仕事であり、またそこに考古学の強みがある。

そのためには、土器や木器、古墳、方形周溝墓、一つ一つの検討を積み重ねなければならない。本稿は、建物や土器、木器のごく一部の分析からの試みでしかない。再考を期し、擱筆したい。

謝辞　本稿を草するに当たり、岡内三眞先生から「低地」の論を更に進めるよう御助言を頂いた。また、労働の性別分業については、小野美代子氏にご教示頂いた。栗岡潤氏には、本稿の構想に関する議論に付き合って頂いた。三氏に文末ながら感謝申し上げたい。

註１　弥生時代、古墳時代の社会は、部族社会を基礎とする首長制社会と考えられる。そこで、行われる婚姻が出自集団が単位であることには異論はないであろう。問題は、当時の集落の構成や親族構造がどのようになっているのかという点であろう。田中良之氏が述べるように、問題点が多く、別に論じたい。

註２　比田井氏は外来系土器は人の移動を示すものとして、特にそのあり方について４つの類型にまとめられている（比田井2004）。「土器組

成がそろった状態で集落構成員規模の移動が想定されるが、結果として、最終的には在来の地域の人々の中に融合埋没するかたち」(pp249l19～pp250l1) が**大規模融合埋没型**、「土器組成がそろった状態で集落構成員規模の移動が想定されるが、結果としてその土地の在来土器に取り変わって定着するもの」(pp250l3・4) が**大規模非融合定着型**、「土器組成全体単位の移動は想定されるが小共同体単位の小規模のもので、最終的には在来の地域の中に埋没消滅するかたちを採るもの」(pp250l8・9) が**小規模埋没型**、「甕を代表とした、限定器種を携えた一時的な移動が想定されるもの」(pp250l11) が**一時波及型**である。

若狭徹氏は、故地との類似度を、「レベル0……故地からの搬入品。」「レベル1……在地生産でありながら故地の形態や技法に忠実な模倣品。たとえば東海西部系有段高坏においては、坏部内湾指向・脚部内湾指向・口唇内側の端部面取り処理・器壁の白色施行などが指標であり、その要素の多くを備えていることが「忠実なコピー」と判定する基準となる。北陸北東部系の千種甕においては、尖底・外面刷毛整形・口縁～頸部ナデ・口唇端部外面の面取り処理・内面頸部の接合方法・内面調整といった要素の多くが観察できればレベル1。」「レベル2……外来系土器の典型からは離れているが、在来系譜で説明不可能なもの。これは故地の雰囲気を残すものから、一部部位に影響をみる程度のものまで多様性に富む。空間的もしくは集団的な距離による間接模倣、情報途絶による変容など、様々な理由で模倣度が下がったもの」(若狭2007pp102l5～l 14) に分けている。

引用・参考文献

浅野信英　2001 a　『前田字前田第1遺跡』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第15集　鳩ヶ谷市教育委員会

2001 b　『三ツ和遺跡－八幡木1丁目19－4地点－』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第17集　鳩ヶ谷市教育委員会

岡田勇介　2009　『東谷／平沼一丁田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第360集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒済和彦　1995　『鳩ヶ谷市三ツ和遺跡－八幡木2丁目6番地3・4号地点－』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第8集　鳩ヶ谷市教育委員会

小島清一　1990　『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ』戸田市遺跡調査会報告書第2集　戸田市遺跡調査会

1994　『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ』戸田市遺跡調査会報告書第4集　戸田市遺跡調査会

塩野博・伊藤和彦　1968　『鍛冶谷・新田口遺跡』戸田市文化財調査報告Ⅱ　戸田市教育委員会

嶋村一志・長瀬出　1999　『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告25集　北区教育委員会」

田中良之　1995　『古墳時代親族構造の研究』　柏書房

1998　「出自表示論批判」『日本考古学第5号』pp.1～18　日本考古学協会

都出比呂志　1989　『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店

中島広顕・小林高・小林理恵　1995　『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告16集　北区教育委員会

西口正純　1986　『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

樋上　昇　2010　『木製品から考える地域社会－弥生から古墳へ－』　雄山閣

比田井克仁　2001　『関東における古墳出現期の変革』　雄山閣出版

2004　『古墳出現期の土器交流とその原理』　雄山閣出版

福田　聖　2009 a　『反町遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田　聖　2009 b　「低地遺跡から見た関東地方における古墳時代のはじまり」『研究紀要第24号』pp.5～26　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2011 a　「関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡」『研究紀要第25号』pp.139～158　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2011 b　「埼玉県における古墳時代前期の植生と木器の樹種選択」『埼玉考古第46号』pp.53～72　埼玉考古学会
松井一明　1995　「古墳時代の掘立柱建物について」『古墳時代の集落』静岡県考古学会
2002　「竪穴住居と掘立柱建物－静岡県下の低地集落の建物構造と集落イメージ」『2001年度静岡県考古学会シンポジウム資料集　静岡県における弥生時代集落の変遷』pp.86～109　静岡県考古学会
溝口孝司　2010　「弥生社会の組織とカテゴリー」『集落からよむ弥生社会弥生時代の考古学８』pp.74～95　同成社
山本　靖　2005　『北島遺跡Ⅹ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第302集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2006　「古墳時代に形成された方形環濠」『専修考古学第11号』pp.19～38　専修大学考古学会
若狭　徹　2007　『古墳時代の水利社会研究』　学生社